

長崎外国語短期大学の誕生

青 山 愷

本稿は2000年に青山愷氏が執筆された手記をもとに内容を一部修正のうえ、掲載したものです。そのため、2000年当時の組織名称や肩書などに一部異同が見られる場合があります。あらかじめお断りしておきます。

はじめに

昭和25年（1950）4月 長崎外国語短期大学は発足した。本年は丁度50周年にあたる。また、来4月には長い間の懸案であった長崎外国語大学の開学をみる。

短期大学制度は昭和25年に始まった。九州では英語・英文学は西南女学院・活水女子と共に最初の短期大学であった。翌26年に長崎県立佐世保商科短期大学（長崎県立大学）が開学した。

保育の純心短期大学も26年であった。大学としては後発になってしまっただけに感慨もひとしおである。

本学院の創立は昭和20年（1945）12月とするがこの55年、時代の波にほんろうされ苦難の連続であった。しかし同時に多くの事柄に恵まれた歴史でもあった。そして10,234名（平成11年度）のものが卒業し、各方面に進出している。

昭和20年代、30年代には教職につく者が多かった。戦後発足の新制中学には教師がいなかった。とくに離島では英語の教師は不足がちであった。思い余った五島の中学校長が土産を片手に来学した。多くの学生が五島、対馬など離島の僻地に赴任した。退職し奄美大島の地で成果を上げた二部卒業生もいる。人事交流の少なかった時代であったのでそのまま留まった人もいる。

そして長崎県下で小学校3名 中学校14名（1992年名簿）の校長を輩出している。九州、なканずく長崎県の英語教育に大きな貢献と影響とを与えて今日に至っている。

1. 長崎YMCAの復興と長崎外国語学校

さて、本学は昭和20年12月1日の長崎YMCAの開講（第二次長崎YMCA運動）を

もって創立としている。

昭和20年8月9日長崎市に原子爆弾が投下され、15日にはポツダム宣言を受諾して15年間の戦争は終わった。

青山武雄（日本キリスト教団長崎馬町教会牧師）は戦時下、長崎東陵中学（長崎南山高校）の教諭であったが、中学の復旧が終わる10月に辞職した。

小さな聖書とトマス・ア・ケンピスの「イミタチオ・クリスチ」とを携え、一人旅に出た。徒歩で西彼杵半島の海岸線を北上し、七ツ釜から漁船にのり上五島似首に上陸した。その間にキリスト教による精神文化の再建を願い学校と社会福祉事業およびキリスト教の宣教を併せた長崎YMCAの再建を構想し学校設立を考えた。

帰るとただちに古屋野宏平（長崎馬町教会員）など長崎市内キリスト教会有志を相はかり、長崎YMCA再建を確立した。

12月1日長崎馬町教会牧師館を事務所とし英語学校発足の準備にとりかかった。なんの式典もなく、ただひたすら学校の将来を神に祈った。職員として平野英二、三好明子（いずれも長崎馬町教会員）がこの開校に参加した。

翌21年1月英語初級中級のクラスが、藤田靖子、緒方純雄が就任した4月から婦人教養科さらに9月に大学予備科が始められた。

当初古町教会 つづいて銀屋町教会が用いられたが、原爆により倒壊した長崎馬町教会の復旧がなると 近隣の長崎バプテスト教会（当時）とともに教室として利用された。

戦争直後のこととて、市内には復員してきたもの 引揚者 食糧難のため退学帰郷したものなどの青年があふれていた。これ等青年が僅かばかりの手書きのポスターで英語とキリスト教教育を求めて入学した。

しかし語学教育についてゆけず一人減り二人減りし 学期末に至りとうとう中等科の教師は辞任を申し出る有様であった。

これらの学生の中から旧制七高、佐高に進学するもの 早稲田大学に進み（株）丸紅の石油関連部長になったものなどを輩出した。

かねてより設置申請していた長崎外国語学校（校長青山武雄）が、22年4月30日に各種学校として長崎県知事より認可された。旧制高校専門学校と同じ3年制の専門部英文科商科の学科を設けそれぞれ定員を50名、50名とした。

教員組織は本学教師のほか長崎経専（長崎大学経済学部）の兼任が多かった。それに活水女専の教師などであった。若手の本学教師は緒方純雄（同志社大学教授 新島学園短大学長）に榎十四郎（長崎馬町教会員）、J. ウイルソンが加わった。

榎はキリスト教主義学校の設立にこたえ長崎経専を辞して連なった。

授業ではタウシグの経済原論、レンテンマルクの金融論などが講じられ学生を悩ませた。後年中尾実（同窓会副会長）は「学び得たものは誠に素晴しく今でも誇りに

いたしております」と述懐している。

ある経専教師は経専と外語から一名ずつを損害保険会社に推薦したと言う。

25年3月 在学生の英語学力検定試験があり文部省より（旧制）中学女学校英語科教員免許資格が与えられた。これにより旧制中学（高校）教員への道が拓けた。

専門部はもともと長崎外国語専門学校（旧制）を目指して設立されたが、占領下の学制改革で専門学校の認可を得ることは不可能であった。退学する学生も出 学生達も重大な関心をもち度々協議し学校 教師に訴えたが短期大学の制度発足を待たなければならなかった。もし専門学校設立が可能であったなら本学のその後の歩みは異なったものになっていたであろう。

2. 長崎YMCA会館の建設

YMCAを始めるに当って原爆で類焼した袋町の長崎市公会堂（鉄筋コンクリート2階建もと長崎YMCA）の譲渡をねがったが長崎市には計画があり断念せざるを得なかった。

そこで疎開となり空地であった本大工町（魚の町）1番地（旧長崎市公会堂）の土地833坪を長崎市より借地し建設することになった。

建築資材を入手することは大変困難であったが、三菱重工より戦争末期動員のため建てられた寮四棟の払い下げを受けその木材を利用することが出来た。ガラスはアメリカ軍政府の配慮によりようやく再生品の割当てを得た。

また長崎工業の教諭が時間をさき机 ソファを製作された。この木造2階建387坪の校舎が22年9月竣工し長崎YMCA会館と呼んだ。市内では戦後のもっとも早い時期の建物であった。これがため募金が行なわれ、内外から454万圓有余の資金が捧げられた。



本大工校舎玄関前で 1953年頃

これより先22年2月 長崎YMCAは常任委員会を構成し、さらに4月には昭和5年（1930）世界恐慌のため会館を売却し活動を停止した長崎基督教青年会維持財団を継承した。

長崎医科大学長の古屋野宏平が理事長に、常務理事・総主事には青山武雄が就任した。

ここに法人と組織が出来た。長崎基督教青年会維持財団が設置経営する長崎YMCAと長崎外国語学校となった。

長崎YMCA会館は市の中心部にあり、長崎YMCA 長崎外国語学校専門部のほか、長崎ユネスコ協会 長崎市留守家族会などの団体が事務所をおき多彩な活動をした。それは戦後の長崎の文化センターであった。

3. 長崎外国語短期大学の設立

旧知の湯浅八郎同志社総長が国際キリスト教大学（ICU）の創設にかかわり初代学長に就任した折、被爆地長崎がもっとも適地であることを訴えたこともあった。いよいよ学制改革がすすみ旧制高校・専門学校は廃止となり、高等教育は新たに大学と初級大学（短期大学）となった。長崎YMCA理事会は昭和24年3月長崎外国語学校専門部を短期大学に昇格することを決議し、長崎YMCA会館をもって校舎とすることとした。



これがため短期大学設立後援会が結成され中部悦良長 本大工校舎玄関前で1953年頃
崎商工会議所会頭が中心となり募金が行なわれた。

また、戦後とて教員組織を作ることは困難であったが大塚節治同志社総長（のち本学理事）の種々の助言と協力があり また教え子にあたる高木暢哉九大教授（福岡警固教会員）も教師の斡旋の労をとられた。それらの関係は今日までつづいている。

米英語学科53名の学生が入学し25年4月15日第一回入学式を つづいて5月25日
荒川文六九大総長（福岡警固教会員）を迎え開学式と新館竣工式とを催した。念願の
長崎外国語短期大学の第一歩が踏み出された。

市内には活水学院があったので 主に男子の教育機関として発足したが 第二回には
県立高女時代に原爆被爆した樋口（田川）恵子（日本の原爆記録Ⅱ 雅子たおれず
所収）など当初から少数の女子学生も在籍した。隣接地に市民運動場（野球場）と卓
球会館が出来スポーツ なかでも軟式野球部が盛んであった。卒業後も彼等は市内の
企業チームで活躍した。労働基準局に入局し、さらに本省で勤務した部員もいる。

当時の長崎YMCAは多数の会員を擁して各種の活動が行なわれ また音楽のプロモ
ーターとして演奏会を催していた。学生はこれらに参加し人々はYMCAの学生とも呼んだ。

校舎から6・7分も行くともち中に出る。本大工町校舎時代の学生の教室はまさしく
長崎のまちであった。長崎のまちが学生を育てた。また、10月7・8・9日には隣
の市民運動場で長崎くんちの奉納踊が演ぜられる様になった。喧噪をさげ当日は期末
試験あけの休日とした。本学は10月10日以降が2学期となる慣しが出来た。

敗戦から35年（1960）にいたる期間は激動の時期であった。本短大が発足した翌
月25年6月には朝鮮戦争が起き 北鮮軍はまたたく間に韓国全土を席捲し釜山にせ
まる勢いであった。そして板付（福岡市） 佐世保は米軍の最前線基地となった。

この戦場で多くのアメリカ（国連軍）兵が死傷した。本学学生は佐世保で艦船から
陸揚げされる米兵の袋入りの遺体をついだ。

J.ウィルソンは23年9月いわゆるゼイ・スリーとしてアメリカYMCAから派遣された本学初代のアメリカ人教師であり英会話を担当した。

彼は朝鮮戦争 再軍備がすすむ中で「平和を守るには平和の方法を」と述べてガンジーの非暴力抵抗による平和運動も提唱し長崎市に平和会を結成した。また、原爆羅災者のためのシュモアハウス（橋口町市営アパート）の運営などにも携わっていた。

ところが朝鮮戦争が激化するとアメリカ軍政府（GHQ）は不法滞在を理由に強制退去を命じた。27年4月28日米軍バスに収容され帰国をよぎなくされた。

本学の教育方針について青山武雄は20周年記念式や1号館竣工式など折々に述べているがここではもっとも早い時期である長崎外国語学校専門部開校時の募集要項と後年の長崎外国語短期大学学生要項の沿革誌とを掲げる。

すなわち昭和22年（1947）長崎外国語学校専門部募集要項に「本校の特色」として

1. キリスト教に基づく人格教育と国際文化的教養
 2. 語学 ことに英語を重んずる
 3. アメリカ諸学校の特徴を徹底的に受け入れて完全なる男女共学 自主的教育
 4. 世界YMCAと連絡して優秀なる卒業生に留学の機会を助成すること
- と本校の教育方針を明記している。

また、長崎外国語短期大学学生要覧には開学以降沿革誌がつづられそれは順次書き改められた。長い財政上の苦況から脱し旧本館が完成をみた46年の学生要覧には以下のような叙述がみられ本学の教育理念となっている。

「われわれの学園は次の如き基本的理念のもとに設立された。

一つ、人間は何事にも拘束されることのない、自由、自主の存在である。従ってこの学校の目標は主体的人間の自覚をよびおこす教育でなければならぬこと。

二つ、他人、更に社会、国家は、単なる自己実現の手段、道具ではなく、むしろ自己を規制し制約するものであることを確認する教育。

三つ、われわれの学問は神と人に奉仕することに生きがいを感じるような責任あるものでなければならない。

これらの理念が深く、プロテスタント主義の精神に基づいていることは、説明するまでもない。従ってこの学校は当初からキリスト教主義教育を明確に打ち出した。

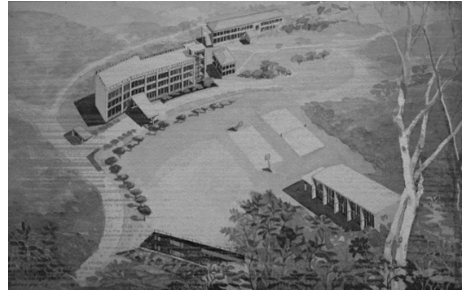
このことは一つには、現在の教育がややもすれば機械的、技術的なものに堕していることに対する反省でもある。教育は、どこまでも個性を尚び、人格を尊ぶ精神的作業でなければならない。

そして、根本的理念と、これを実現するエネルギーをキリスト教精神にもとめたのである。」（昭和46年学生要覧より）

26年3月私立学校法が施行されたため本法人は改組をなし名称を変更した。すなわち財団法人長崎基督教青年会から学校法人長崎YMCA学院となった。

長崎YMCAは法人格を失った。それは選択の余地のない事柄であったが苦渋に満ちたものであった。

しかし長崎YMCA・長崎外国語短期大学の事業は一体的に運営されており従来となんら変わるところはなかった。これらの運営が昭和34年（1959）の本学住吉町への移転までつづいた。



長崎外国語短期大学新築工事透視図

参考

昭和21年（1946）長崎馬町教会改築寄付金

父青山武雄の書類整理中、この度長崎馬町教会改築寄付金の関連書類（封鎖寄付金申込書など）を見出した。

長崎馬町教会会堂は原爆の爆風により側壁の木柱が折れ屋根が崩落し使用不能となっていたが、翌21年3月に修復された。

この度の書類により再建後教会では寄付金の募集が行なわれ教会員8名が同年11月封鎖寄付金申込書を提出し会堂改築献金を行なっていたことがわかった。

（終戦後 預貯金は封鎖統制された）

それより先、昭和20年（1945）終戦の年の12月1日、辛じて残った牧師館2階を事務室として長崎YMCAが再建・発足（第2次長崎YMCA運動）した。

翌21年（1946）1月より長崎古町教会で、つづいて進駐軍（米軍）撤収後の長崎銀屋町教会を用いて長崎YMCAの英語講習が始められた。

長崎馬町教会会堂の再建により他の教会より遅れていた日曜礼拝が復活し、長崎YMCA、翌22年（1947）3月開校の長崎外国語学校（3年制）と相まって3者の連合体が出来た。学生は同時にYMCAに参加し教会員となった。

戦後の復興気運、キリスト教ブームにのり多勢の青年が教会堂に出は入りし活動した。

これがその後の長崎YMCAの諸活動を準備し、長崎外国語短期大学を生み出した。